

「高ぶる者とへりくだる者」

(ルカによる福音書 18:9-14)

先週に続き今週も、「祈り」についてです。今週のたとえでは、「うぬぼれている」人として、ファリサイ派の人が登場します。ファリサイ派の人々はとても熱心で、真面目な人々でした。律法をあらゆる現実の状況に当てはめ、解釈し、具体的にし、それを正確に守ろうとしました。しかし残念なことに、「あの人と違って、わたしはこれができているから正しい」、というふうに、彼らはいつも誰かを罪人としなければ、自分たちの正当性を確認できませんでした。彼らの祈りもはや、単なる自己肯定の宣言になってしまっていました。

他方、徴税人は遠くに立ち、神殿に登ることも、目を天に上げることもできず、胸を打ちながら祈りました。主イエスの時代、徴税人はユダヤを支配していたローマ帝国のため、同胞のユダヤ人から税金を徴収する役目を担っていました。その役職につくために多額の資本を投じたとも言われ、なんとかそれを回収する必要もあり、不正な方法で取り立てることもあったようです。それゆえ徴税人は、同胞であるユダヤ人に見れば支配国の手先、十戒の「盗むな、偽証するな」に照らせば、罪人に他なりません。

世間的に見て正しいのは、律法をよく学び、忠実に生きようとしたファリサイ派の人に決まっています。しかし、主イエスは「義とされて家に帰ったのは徴税人の方」と言います。義とされる、とは「神に善しとされる」とか、「神との正しい関係に入る」という意味です。どちらの祈りを神は喜ばれたか、ということです。神の前で自分を誇ろうとしたファリサイ派の人と、自分のありのままを神の前に差し出した徴税人。主イエスからみれば徴税人の祈りこそが神との正しい関係を表すものだったのです。

わたしたちは往々にして、罪深さや自分の弱さを克服するために努力することに意味があると考えがちです。しかしそこには、自らの行いや力に頼り、神から離れてしまう落とし穴が潜んでいます。主イエスは、弱さは神の憐れみに出会うための入り口、門だと教えています。自らを、弱さもろとも主の前に差し出し、主に頼って生きたいと願うとき、十字架上で最も弱い者となってくださった主イエスが、両手を広げて迎えてくださいます。

主イエスが来られたのは、「正しい人を招くためではなく、罪人を招くため」です。さて、わたしたちは主の前にどのように立ち、祈っているのでしょうか。自らの姿を顧みます。